

第12回「泉大津市オリアム随筆賞」

【泉大津市長賞】

毛布と私

加納 博子・大阪府泉大津市

万雷の拍手の音は、どしゃ降りの雨の音の様だ。何千人もの大勢の人達の拍手。その音はパチパチパチではない。ザザザザザザザ……。と、間断無く、速く、大音量だ。

それは、泉大津の機織りの音に似ている。

私が子供の頃。市内には、「織屋」と呼ばれる、大小の様々な工場が、たくさんあった。泉大津市は、割れんばかりの拍手の音がするまちだった。織屋の数は減ってしまったが、今も泉大津は、毛布の生産高が日本一である。

私は、昭和三十九年生まれ。以来、五十九年、泉大津市民として生きている。

それは、私の誇りだ。私は、毛布が大好きなのだ。

「泉大津のたをやめの織る羊毛は、オーストラリアの牧童の手に飼はれた同じ羊の毛」という、泉大津商工会議所設立趣意書の、このくだりも、郷愁豊かで素敵だ。

毛布は、本当にすばらしい。

木枯らしの吹きさぶ中、疲れはてて帰宅。家の中とて冷えきっている。どきりとソファにへたりこんで、毛布を引き寄せる。ふんわりと柔らかい毛布は、すぐに私を温めてくれる。電気もガスも石油も不要。ただ、かぶるだけで寒さをしのげる。実に優れた防寒具だ。

毛布の良い点は、それだけではない。

打ちひしがれた時。情けなさや恥ずかしさで、いたたまれない時。毛布の中に潜り込めば、下がりすぎた自己肯定感が、少しずつ回復する。毛布のほわほわとした暖かさが、私を慰め、励ましてくれるのだ。

先日、私はやらかした。転んでしまった。日曜の昼下がりだ。大勢の人の前で、足が滑った。スーパ―銭湯だった。全裸である。「ウギャ！」と声が出て、皆が一斉に私を見た。顔から火が出た。恥ずかしさに身悶えしながら、家にたどり着き、毛布をかぶった。

「アホめが。ワタシのアホめが！」と声に出す。毛布の中で、思いのたけをぶつけていると、少しずつ気持ちも落ち着いて。「ひとつ風呂浴びるついでに、注目も浴びてしまたなア」という、心の声が聞こえた様な気がして、立ち直る事ができたのだ。穴があったら入りたい。しかし、穴は無い。そんな時は、毛布の中に隠れて、自分を叱れば、元気になれる。

失恋した時も、毛布の中で泣き明かした。

二十二歳の秋だった。携帯もスマホも無かった頃だ。連絡手段は、家の固定電話である。私は、なるべく外出も控えて、彼からの連絡を待ち続けた。が、次第にそれは、間遠にな

り、彼の心変わりを知った。最後に逢った時、「もう、無理。ごめん」と言われて、あっさりと振られた。もう、一生、恋などできない様な気がした。その夜、私は毛布の中で、絶望の涙を流したのだった。けれども、ふわふわとした優しさの溢れる毛布は、私を、絶望の淵から救ってくれるかの様に、眠りへと誘ってくれた。辛く苦しい夜を、乗り越える事ができたのは、毛布の力によるものだ。

そして、時に毛布は、子供の頃を思い出させてくれる。私の実家は魚屋だった。祖父は、競馬と競輪が大好き。商売熱心では無かった様だ。売れ残った魚を、煮たり焼いたり、「きずし」にしたり……。骨身を惜しまず働く祖母の頑張りで、糊口を凌いでいた頃もあった。暗くなった頃。こそそと帰って来る祖父は、「どこへ行ってましたんや」と祖母に叱られていた。「知らん、知らん。ワシは寝るんじゃ」と、毛布をかぶると、「博子もおいで」と私を中に入れてくれた。「今日はアカンかったけどな、賭けた馬が勝ってくれて、ウ・マ・い・事・行・く・日・イ・も・あ・ん・ね・や・デ」と言う。私は、祖父に教えられた通り、「ホ・ー・ス・ゴ・イ・な」と返して、頭を撫でてもらうのが好きだった。「博子・つ・ち・ゆう・名・前・は、ワシがつけたんや。博打の神サ・ン・に・守・つ・て・も・ろ・て、こ・こ・つ・ち・ゆう・時・に、勝たしてもらえよ。そやけど、これは、誰にも言うたらアカンで。二人だけのヒミツや」そう言って、指切りした事も、よく覚えていた。毛布に指で字を書いて、「博」の漢字も教えてくれた。祖父は、働き者ではなかった。が、可愛げのあるオモロイ人だったと思う。疲れて、うたた寝している祖母の背中に、そつと毛布を掛けてあげる優しさもあった。疲れさせているのは、祖父自身に他ならないのではあったが。私は、毛布と共に生きてきた。失恋もしたが、新しい出逢いもあり、二十六歳の冬に結婚する事もできた。

不意に飛んできたハエを、ポリ袋で捕まえて、そつと窓から逃がしてやる様な夫である。声を荒げた事もない。いつも穏やかで優しい。大雑把で至らない私を、大らかに包みこんでくれる。暖かい毛布の様な人だ。夫のエトが、羊である事との因果関係は、知らんけど。

私は幸せ者だ。

祖父のつけてくれた名前のおかげで、結婚という、人生の博打に勝てた様な気がしている。